

保育園・認定こども園・幼稚園でのプール遊びの実施に向けて
プール遊びから水遊びへの展開 -新型コロナウイルス対策への助言-

2020/6/11 現在

元尚絅学院大学附属幼稚園長・新医協（新日本医師協会）顧問 岩倉政城

はじめに

プールの季節がやって来ました。園の活動で最も子どもたちが歓声を上げる遊びの代表格です。しかし、今夏は新型コロナによる感染を考慮して早くも自粛を決めている園も多いと思います。子どもへの感染防止、保護者からの不安の払拭、クラスターの発生元とならない、と、がんじがらめに成り、園が際限なく自粛項目を拡大し、歌は唄わない、危険な昼食は廃止、食事中的の会話は禁止、となります。どれをとっても私たちが願う豊かな保育を通して子どもがのびのびと発達するという願いに反します。“感染防止”を口実に“保育と言えない保育”が際限なく広がっている状況です。

保育の真髄を失わないままでどうやって子どもたちの大好きなプール活動を展開できるのかを考えることは保育者の大切な課題でもあります。

保育のプール活動を水遊びの活動に

伝統を蓄積した園ではいつの間にか四季の行事が積み上がり、夏にはスイカ割りやお泊まり会、そしてプール遊びが定着しているところが多いでしょう。

しかし新型コロナを理由にこれらの行事を安全のためと称して単に取りやめるのではなく、どの行事にどんな保育者のねらいがあったのかを考え直す機会にできないでしょうか。

例えばスイカ割りには、先生だって目隠ししたらボクラと同じドジなんだという人間の対等性、成功だけを目指すのが人間では無い、失敗を笑いに変え、学びの糧にできるという、相対的な価値観を養い、最後にみんなでスイカを味わう共食の楽しさを体験します。

ですからプールにだってねらいがあったはずです。実際のプール遊びの姿を写真で見てみましょう。誰一人として泳いでいる子は居ません。潜っても居ません。足を踏み込むことで跳ね上がる水の感覚を楽しみ、体中に水を跳ね上げ、水の感触を皮膚丸ごとで感じる異次元の楽しみを、プール遊びから得ています。つまり園児にとってプールとは、土と床と空気という固体と気体の日常の世界から、液体である水というつめたい、体にまわりつく異次元の世界を全身の肌で感じる感覚あそび、集団遊びです。その上、夏の暑さの中でバテ気味の気力を冷たい水と出会う非日常を体験し、互いに水をかけ合って刺激し合うゴールデンタイムです。

このことは、保育での“プールあそび”は水泳帽とゴーグルを着けてコースを泳ぐあのプールではなくて、水を体全体で共に味わう“水あそび”であることに気付かされます。



一旦“プールあそび”を“水あそび”と保育者が読み替えてしまえば、たちどころに豊かな発想が浮かんできます。

ホースからの冷たい水をかけ合って写真のように遊ぶとき、子どもたちの興奮は頂点に達します。

あまりの冷たさに「ヒエ〜！」とさげびながら、次から次から園児たちが冷たいホースの雨に向かって挑戦し、逃げ惑い、また挑戦し、止むことを知りません。

やがてびしょびしょになった園庭を素足でピチャピチャ跳ねながら走り回る興奮も、お祭りの踊りのように楽しいものです。

竹筒で水鉄砲を作ったり、それを使ってクラス対抗で水鉄砲合戦を楽しみます。

園庭の水溜まりに写真のようにポスターカラーを溶かし込んで園庭丸ごとを色塗りして遊んでもいいでしょう。

もちろん魚採りのタモやガラス板を付けた水中観察箱を持って川遊びに出かける福島県南相馬の園だってあります。

その園では放射能汚染で川の放射線リスクが残るので、園庭に井戸を掘り、それで作ったせせらぎを再現しました。夏にはその水の流れに子どもたちが体を浸して寝そべり、冬は張った氷を剥がして楽しんでいます。

「夏だ、プールあそびだ」という発想から、「夏だ、水あそびだ」と、発想を転換してみてください。保育実践者なら無数のアイデアが浮かぶはずです。



プールでのリスク

公営・商業施設プール

コロナウイルスは唾液や鼻汁から排出されますが公営や商業施設のプールや学校等のプールはコロナウイルスに効果のある塩素消毒がされており、塩素濃度も規準が厳格に守られているので問題はありません。そこでの注意はロッカールームやトイレなどの共用エリアでの接触感染で、これは従来までの一般的な手指消毒やドアノブなどの定期清掃で対応できます。

設備された園プール

園プールでのリスクは従来までは溺れること、そして水いぼやとびひなどの感染症ですが、足拭きマットやタオルの共用などを避ける配慮があればリスクはありません。

園に設備されているタイプの固定プールでは塩素濃度の規準管理(注)が公文書に謳われていません。プールサイズが大きいと子どもたちは潜ったり、泳いで顔が水面下に入り唾液や鼻汁などウイルスが混じるリスクがあります。ですので、塩素消毒が望ましい管理法となります。しかしこの規準で管理するには手間もかかり、また塩素濃度が高いため、子どもたちが楽しむことの妨げになりがちです。

でも、小さな規模のプールでしたら水道水を張って遊泳中は絶えずプールに新鮮な水を注入し、別にホースを設けてサイホンにして排水し、水の流れを作り新しい水に置き換えることで汚染の濃度を抑えてリスクを減少させることができます。

なお、サイホンを使わずプールを満タンにして溢れさせる方法は、通常より水深が20cm以上深くなることで溺れる事故を誘発する危険性があるので決して行わないでください。また、水槽の水抜き栓を開けて水循環を作ると、排水口に髪の毛などが吸引され、頭が水中に引っ張られて思わぬ事故が起こる場合があります。遊泳中の水抜き栓は使ってはなりません。

注「遊泳用プールの衛生基準について」(平成19年5月28日付け健発第0528003号厚生労働省健康局長通知別添)遊離残留塩素濃度が0.4 mg/L から 1.0 mg/L に保たれるよう毎時間水質検査を行い、濃度が低下している場合は消毒剤を追加するなど、適切に消毒する。

ビニールプール

ベランダや園庭にビニールのプールを置いて水を張るタイプの場合は水深の浅さから泳ぐ子どもはまずいません。また顔を水面に漬けることも稀で、唾液や鼻汁の混入も殆どありません。一斉にプールに入る子どもの数を可能な範囲で減らして活動してください。写真にあるタイプで5人を目安にして下さい。高さが低いので中の水が跳ねて散らかり、好都合にも水位を下げます。そこへ次々と水道水を追加して、できるだけ新鮮な水に置き換えましょう。そうすれば汚染があっても希釈されてリスクが減っていきます。

プール後の注意

口、鼻、目の粘膜からウイルスが侵入します。プールを終えたらパチパチ目を洗い、ブクブク口をゆすぎ、と鼻をかみ、パチパチ・ブクブク・チィ〜ンのあと、銘々タオルで体を拭いて終了しましょう。

ご提案や質問があればどうぞ新医協事務局にお寄せ下さい。

新医協（新日本医師協会）

〒171-0021 東京都豊島区西池袋 1-10-2 日高ビル

Tel : 03-3988-8387 FAX : 03-3983-6165

honbu@shinikyo.com <http://shinikyo.com>